
この星の下で：Re

ダン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この星の下で・Re

【Zコード】

Z3783H

【作者名】

ダン

【あらすじ】

テロ、それは関係の無い者を巻き込み理不尽な理由で人を殺す行為。そんなテロが各地で起きる中世界は対抗策としてテロ対策特殊チーム、通称CTTFを結成した。

//シショノ プロローグ

西暦二〇八四年十月二十四日午前一時十四分 中国南部

「いちら『テルタ第七小隊コード1。敵機3機を発見。至急応援を求む。」

「ジジッガガガツ・・・」こちら『テルタ第八小隊コード1』了解。すぐ行くから先に倒してんじゃねーぞ！」

「お前が追いついたらな。じゃ早く来いよ。」

「なつ！？お前待・・・」

ピッ・・・

通信機を切る。

「たくつ・・・アイツはいつもいつもくしゃがって・・・」

オレはたった今通信機に出たやつの愚痴を呴きながら敵機を見る。その視線の先には茶色のロボットが3機いた。

WA・・・

正式名称はWeapon Armor ウエポン アーマーと云い現代における近代兵器の一つになっている人型汎用機械ロボット兵器だ。5年前に工事用として開発されてから研究が進み、今は戦争による主力兵器となつている。

そのWAが今三角形のフォーメーションを組んでオレの前を通り過ぎようとしている。

倒すなら今しかない。オレはすぐ行動に移した。

手に持つているガトリングで一番前にいるやつをロックする。そして、引き金に手をかけ・・

ズダダダダダ！――！

一気に引いた。ガトリングからた銃弾が前にいる敵機をガラクタに変える。

「敵だと！？」

「後ろだ！！」

右にいた一機が素早く後ろを向いてガトリングを連射する。

・・・遅いんだよ。

その一機が撃つたころにはオレはもう敵の真横に移動していた。ガトリングを撃つた敵機を最初のやつと同じようにガラクタにした。最後に残った一機がオレと対峙する。

「黒い機体・・・マジかよ・・クティフのやつらじゃねえか・・・。
か・勝てるわけねえ！――！」

残った一機はオレの姿を見ると背中のブースターを全力で使い、逃走を試みる。

「逃がすわけないだろ。」

オレは逃げる機体に狙いを定める。

「恨むなら戦争を恨みな。」

L

ゆうべつじてんを金を貰へ。

「たすけ・・」

ズガガガガガ！－！－！－！

最後の一機もブースターに銃弾をくらい、爆発して粉々に砕け散つた。

通信機のスイッチを押す。

「こちらデルタ第七小隊コード1。敵機三機破壊。帰還する。」

そして黒い機体は基地へと向かった。・・・

//シニア プロローグ（後書き）

皆さんお久しぶりです。自分が最初に書いた作品をリメイクしてみました。新しくなったこの星の下でお楽しみ下さい。

「ふー・・・」

オレは基地に着くと整備室で黒いロボットから降りて近くのベンチに座る。

「お～お疲れだな。樺崎。なじかざき」

オレが座ると体格のいい体中すすぐらけの男が話しかけてきた。

「川島のおっちゃんもお疲れです。」

オレも返事を返す。

この人は川島かわしま 権藏ごんそうさん。

基地の整備班の隊長をしていて何かとオレに話しかけてくる氣のいいおじさんだ。

「いやしかしさすがと書った所か。聞いたぞ？ドルガを三機破壊とはさすがCTEFTのエースだな！！」

ガハハッと豪快に笑う川島さん。ドルガとはオレが倒した敵機の名前だ。

エースか・・・

「オレはエースじゃあつませんよ。機体もボロボロですし・・・」

オレはさつき自分が乗っていた機体を見上げる。

その機体はスマートな身体に細かな細工の指先、背中には加速用のブースターと近接用レーザーサーベルが付いていた。その全身は黒のオールカラーで色取られている。

JP921型

今や世界でも名立たるWA産業国となつた日本で作られ、今年CTFに導入された最新の局地用WAで周りの皆はスマートな身体と背中に刀のようなものがある事から日本の忍者に見立ててシノビと呼ばれている。

つか名前そのままだよなあ。名付けたの誰だよ・・・

「そんな謙遜するな。お前の悪い癖だ。人に褒められた時は自信を持つて自慢すればいいんだ。」

川島さんはそう言つてオレの背中をバンバン叩く。

とうあえず痛いです・・・

その時オレの後ろから大声が聞こえた。

「りょ 諒りょ――!――!」

やれやれまためんどくさいやつが来やがつた。

「ほり呼んでんぞ。お前の自称ライバルさんがよ。」

そしてまたガハハツと笑う。

笑いすぎて顎が外れないのか心配になつたがオレは自分の名前を呼ぶバカの所へ急いだ。

「おう諒、探したぜ！」

「整備室で騒ぐなバカ。」

「誰がバカだ！オレには上野 明うえの あきらと言つ立派な名前があんだよ……」

明は大声で騒ぎながらオレに近づいてくる。

「全く大声で人の名前呼びやがつて……」

「ライバルの名を呼ぶのは当然だ！！」

「こいつは何でオレのことをライバルと呼ぶのかねえ……？」

「ま、いいじゃねえか！それよりなんか食いにいこうぜ」

「そうだな。」

オレと明は食堂へ向かう。

基地の廊下には兵士と思われる様々な人とすれ違つた。

「そりや当たり前なんだけどな……」

Counter Terrorism Independent
ce Force

通称CTIF「クティフ」

世界のテロを武力で止める為に生まれたテロ対策独立チームだ。

世界各地のテロを止めるために作られたチームなのだから入るにもそれ相応の実績と実力が伴われるいうなれば兵士のエリートが集まつた組織。

そこにオレと明は所属している。

「つと・・自慢話はここまでにして・・」

食堂に入るオレ達。

ベシンツー！

「あだつー？」

突然後ろから誰かに叩かれた。まあ犯人は分かっているが・・・
後ろを向くと予想通りの人物が立っていた。

「何しやがる七美ーー！」

「へへッ！ボーッとしてる諒が悪いんだよ。」

後ろには髪をショートにした女性、オレと同じ第七小隊コード2の
ふじしま
藤島ななみ 七美がいた。

「よお七美。任務は終わったのか？」

「うん。だつてコイツ一人でさくさく行っちゃうんだもん。」

「お前なあ・・仮にもオレはお前の上官で隊長だぞ？」

「だつて年あんま変わんないし。」

ちなみに明とオレの年が二十三歳、七美は二十一歳になる。

「だからってなあ・・・」

「気にしない気にしない！そう言えば明、理奈が探してたよ。」

「ゲッ！？オレは旅に出たと云々てくれ。」

明は「ソコソと逃げる準備をする。明よ・・それは無理っぽいぞ・・・
明の後ろに黒い影が立つ。

「明――――――――――――」

「ツグエ！？」

明の頭に鉄拳が振り下ろされる。

「また通信無視したでしょ！通信はちゃんと聞きなさいっていつも
言つてるでしようが！――」

その後ろには髪をロングにした黒髪の女性が立っていた。

「あら櫛崎さんと七美。こんにちは。」

「こんにちは理奈。」

この人の名前は土田 理奈さん。明の同僚だ。

「こんにちは。」

「テンメエ理奈！何でオレばっかり殴るんだよ！――」

「アンタが言つ」と聞かないからでしょ！――」

理奈と明が言い争いを始める。

オレと七美はいつもの光景なので全く気にせず、二人のケンカを静
かに見守る。

この一人も仲が良いんだか悪いんだか・・・
ちなみに理奈さんは明の幼馴染でもある。

「それより櫛崎君。アナタ最近不用意に突っ込みすぎよ。敵に囲ま
れたらどうするの？」

理奈さんは言い争いを途中で止めると顔をしかめて聞いてきた。
また痛い所を突いてきましたね。

「まるで死にたがっているみたい・・・」

理奈が暗い顔で言つ。死にたがつてゐるか・・確かにそうかもしないな。

クティフに入つて2年。オレは様々なテロリスト達と戦つてきた。だけど戦つていく内に自分はなぜ戦つてゐるのか。なぜ生きているのかが分からなくなつてきた。

そしていつからかまるで自分から死ににいく様に一人で突っ込むようになつた。

「・・・とりあえずそんな暗い話は置いといて飯を食おうぜー!」

明の言葉にみんなが頷いて食堂に入る。

ウオオオウー————ン————!

そこで突如緊急出動のベルが鳴つた。

//シショソン2 戦う意味

「ガトリングに弾を込めろ！急げ！！」

「オレの機体の整備は出来ているか！？」

「出撃するぞ！！」

ベルの音で基地の中が大騒ぎになる。

「畜生わざわざ出撃から帰ってきたばっかなのにーーー。」

「グチグチ言わない。」

かく言うオレ達も食堂での食事を止めて急いで自分の機体に乗り込んでいた。

「まだ飯食つてないのにーーー。」

「デルタ第七小隊出撃します。」

明の意味の分からない怒りと七美の出撃の声が同時に聞こえる。

そしてオレ達は急いで基地を出撃した。

基地を出てからしばらくすると理奈から通信が入ってきた。

「ピッ！

「ひちらクティフ本部。ただ今中国北部でテロ組織、紅華「こうか」が河北「かほく」の都市を襲撃中だそうです。今回の任務は襲撃中の紅華の全滅及び捕獲と都民を守つて下せ。」

理奈は中国で暴れまわっているテロ組織の名を上げる。

「了解だ。行くぞ七美、飯田。」

「了解です隊長。」

「了解。」

後ろの七美と飯田の機体が返事をする。
七美は任務の時だけオレを隊長と呼ぶ。

「普段もこれだけキッチリしてくれりゃいいんだけどな・・・」

「隊長。」

七美の隣にいる飯田の機体から通信が入る。

飯田は半年前にケティフに入隊してきたやつでオレに憧れて部隊に入つたらしい。

「二Jのまま市街地で戦つより街の外におびき出した方が良くないですか?」「

性格は冷静で状況判断もよく出来る未来の隊長にふさわしいヤツだ。少なくともオレはそう思つている。

「いや、無理だろう。紅華の連中もそれはマズイからわざわざ市街地で戦つてゐるみたいだしな・・・」

「そうね。」

「そうですか・・・」

不満そうにする飯田。自分の意見を通そうとするのは「マイツの悪い癖だ。

「そろそろ戦闘区域に入るぞ。一人共警戒しろ。」

「了解ー。」

「了解・・・」

慎重に都市に近づく三機。フォーメーションは三角形の形を作っている。

WAは基本的には三機一小隊で組むのでどんな方向からも敵に対応できるようになるには三角形のフォーメーションが一番都合がいいのだ。

ガガガガッ！！！

遠くでガトリングを撃つ音が聞こえる。どうやら向こうではすでに戦闘が始まっているらしい。

オレの機体のレーダーが敵機が来たことを知らせる音を鳴らす。

「どうやらこっちにも来たみたいだな・・・」

「敵機三機、来ます。」

その時オレ達の前に昨日みた茶色い機体、ドルガが現れた。

「散開しろ！！」

オレの言葉で七美と飯田が横に移動し、オレは前に突っ込む。さつきまで自分達がいた所が爆発する。

「バズーカとロケットランチャー！？」

七美が叫ぶ。オレは攻撃してきたドルガを見た。

先頭にいる一機がマシンガンを持ち、その後ろにいる残り二機はバズーカとロケットランチャーをそれぞれ持っていた。

後ろの一機はまたそれぞれの武器を撃つ為の体勢を作る。

「せしないわよ……」

七美が素早く手に持つていてるバズーカを撃つ。それは同じくバズーを持つていてる敵に当たり、爆発四散する。まずは一機・・・

「おつとー?」

マシンガンを持つていてる敵がオレに向かつて銃弾を飛ばす。どうやらオレが隊長と判断したらしくランチャーを持つていてるやつもオレに集中砲火してきた。おそらく隊長を倒せばここは切り抜けられると思っているのだろう。

「なかなか優秀な隊長だな・・・」

オレは向かつてくる銃弾全てを避けて背中の近接用レーザーブレードを抜き放つ。

敵は慌ててブースターを駆使してオレの攻撃範囲から逃れようとする。

「やつぱり優秀な隊長の様だが・・甘い!!」

オレは「シクピッドの脇にあるレバーを小刻みに動かし機体を踏み込ませる。

「ハアアー!!」

オレがブレードを力の限り振るつと敵の体は斜め半分真つ二つになつてその場に崩れた。

「よし最後の一機は・・」

近くで爆発が起きる。どうやらロケットランチャーのやつも七美が

倒したらしい。

「はあー・・なかなか手強かつたわね。」

「そうだな。ついでに七美。何か気付いた事は無いか?」

「分かつてゐるわよ。何で相手がロケットランチャー やバズーカを持つてるかって事でしょ?」

「そうだ。」

「どう言う事ですか?」

そこで飯田が通信に加わる。

「ん?ああ、今までの紅華の主力武器は旧式のマシンガンやガトリングだつたんだ。だけどオレ達が今さつき戦つた部隊はバズーカならともかくロケットランチャーまで持つていやがつた。マシンガンも旧式じゃなく最新の物だつたしな。」

飯田は黙つて話を聞く。

「とりあえず都市はもう目の前だし急いだ方がいいな。七美!理奈に通信入れといてくれ。」

「分かつた。」

「通信が終わり次第都市に突入するぞ。」

「一解!!」

そしてオレ達はまた戦場へと戻つて行つた。そこに地獄が待つてゐるとも知らず・・・

「これは・・・」

「ひどい・・・」

「・・・」

都市の中に入つたオレ達はその光景に思わず目を逸らした。
マシンガンやミサイルなどで崩れた家。

その家に潰されたまま動かない老人。

悲鳴を上げながら逃げ惑う人々。

最早地獄と言つてもおかしくない惨状だった。

「・・・」

飯田はその機体からの景色を見て言葉が出なくなっている。

「先に進むぞ。」

オレの声で部隊はそこから都市の中心部へと向かった。
しばらく進むと大きな広場の様な所に出た。

「敵だ！..」

「隊長！..」

次の瞬間にいくつものミサイルが自分達に向かつて飛んできた。

飯田がマシンガンでミサイルを全て撃ち落す。

「サンキュー飯田。」

「大丈夫ですか？」

「油断しないで次来るわよ。」

七美の声が言つか言い終わらない内に次のミサイルが飛んでくる。

「飯田！撃ち落すぞ。」

「了解！」

オレと飯田はミサイルに向かつて乱射する。

ミサイルを全て落とし、煙の晴れた所で敵は姿を現した。

「戦車三台にドルガ一機か。」

そこには広場の中心に集まるようにしてドルガと戦車が固まつていた。

詳しく述べるとロケットランチャーを持ったドルガに戦車三台が囲むように周りにいる。

「まるで砲台だな。」

「冗談言つてる場合じゃないでしょ。」

「確かにそうだ。七美バズーカで煙幕を作ってくれ。飯田はオレと行くぞ。」

「分かったわ。」

七美がバズーカを敵の手前に撃つて煙幕を作る。

「今だ飯田。」

「はい！」

オレと飯田が一気に前へでる。敵は煙幕のなか闇雲にミサイルを放つ。そのなかで暗視装置を付けていたオレと飯田は敵を狙い撃ちにする。

二機の攻撃を受けてあつという間に敵は沈黙した。

「よし敵はいなくなつたな。」

「すいません隊長。」

突然飯田の動きが止まる。

「どうした?」

「戦車の操縦者がまだ生きている可能性があるので少し見ていきます。」

「何だと?あつ!ちょっと待て!...!」

飯田はオレの制止も聞かずに機体から降りると真っ直ぐ戦車の方に向かった。

「おい飯田!...?七美、周囲の警戒を頼む!...」

そしてオレも飯田を追いかける為に機体を降りて飯田の所へと向かう。

「飯田!...」

飯田は戦車の出入り口どうづくまつていた。

「聞いているのか飯田!...命令違は...?...?」

肩を掴んでこいつに向かすと飯田は泣いていた。

「隊長!...」

飯田が泣いていた理由。それは飯田の腕のなかにあった。

「少年兵か・・・」

飯田の腕のなかには血まみれの少年がいた。
年は十一歳くらいだろうか。

「オレが・・・」

飯田がしゃべり始める。

「オレがここに入ったのは憧れてた事もあつたんですけどそれより
こういった子供の命を救いたかった事が理由なんです。なのにオレ
は助けるどころか逆にこの子の人生を奪ってしまいました。」

飯田の肩に手を当てる。

「隊長・・・」

「何だ?」

「オレ達は何の為に戦っているんですかねえ・・・?」

そう言って飯田はまた声を殺して泣き始める。

「・・・」

オレは何も言えなかつた・・・自分で答えが分からなかつたから・
・・

そつとしておいつて思い、飯田に背を向ける。

その時・・・

かん高い銃声と共に飯田の体が戦車から転がり落ちた。
その前にはライフルを持ったテロリスト。

「テメエ——！」

反射的に拳銃を抜き取りテロリストに向かつて撃つ。

パンッ！

乾いた音がしてテロリストは眉間に穴が開きゆづくり倒れる。

「やばいよー」——「一体何まれてる…？」

七美の声に反応してオレは素早く自分の機体に乗り込んだ。
その後に飯田の機体が炎に包まれる。
そして前と後ろから十体の敵機が現れた。

「どうする諒！？挟み撃ちにされちゃったよー…？」

こいつが諒と呼ぶときはかなり焦っている時だ。
敵は前に戦車三台とマシンガンとバズーカを持つているドルガがそれぞれ一機ずつ。

後ろには一台の戦車とガトリングを持ったドルガ三機が立ち塞がっていた。

仕方ないな……

「七美！正面突破するぞ。」

「正面突破なんて無理よ！？」

「無理でもやるしかない。行くぞ。」

オレは前に向かつてガトリングを乱射する。

前にいた戦車一台がその攻撃で大破した。

「もつとうしうがないわね！！」

七美がバズーカを抱えてオレの後ろをついてくる。

「どけ　――」

マシンガンをさらいに乱射し、新たに戦車一台を撃墜する。

「きやあつー？」

「七美！」

七美の悲鳴で後ろを向いたのがミスだった。敵機は「じじぞとばかりに一斉射撃を仕掛けてきたのだ。

「うぐつー？」

避けきれず、左腕にガトリングをくらう。そして右足・右肩・左足と次々と吹き飛ばされた。

「諒！？」

「振り向くな。そのまま突破しろ！」「

「でも！？」

「いいから早く行け！！」

オレは七美を狙おうとしているドルガをガトリングで吹き飛ばす。

「早くしろ。」

「諒、死んじやあダメだからね？」

七美はなんとか囮みを突破して逃走に成功した。そのまま真っ直ぐ

走り去つていく。

死んじやあダメか・・・それはちよいと無理な注文っぽいぞ・・・？すでに自分の機体のディスプレイには右腕以外機能停止のマークが出ていた。

ガトリングの弾も残りわずか・・・
バズーカの銃口をこっちに向ける敵機。

あ、死んだな。

オレは目を瞑る。

まぶたの裏には何故か七美の笑顔が浮かんできた。
約束守れなくてごめんな・・・？

死の覚悟をする諒。

しかし奇跡は突然訪れた。
ズバアーン！！

「ひちらりテルタ第八小隊コード1・諒、生きてるか！？」

いきなり爆発したドルガと通信機から明の声。

周りを見ると十数機ものシノビがドルガ達を囲んでいた。明達が理奈の通信を聞いて応援に駆けつけてきたのだ。
ほかのドルガ達は勝てないと見るや武器を捨てて降参の意を示してきた。

「オセエよ・・・バーカ・・・」

そしてオレの意識は闇に飲まれていった・・・・・・・

//シシアノ 生むの意味

チチチチチッ！

「う・う・ん・・・」

眩しい・・・

オレは太陽の光と鳥のさえずりで目を覚ます。
ここは・・・？

起き上^がるとオレはベッドの上にいた。オレビ^づなったんだっけ・・・？

周りを見渡すと白い部屋にかすかだが薬品の匂^いがする。
どうやらここは病院らし^い。

ああ。 そうだ・・・

オレは昨日の戦闘で大ケガを負つて意識を失つたんだった。
手を動かすと何かやわらかいものが触^ふれる。横を見ると七美がベッ
ドにつづむく形で寝ていた。

何でコイツがここにいるんだ？

「う・う・うん・・・」

七美がいかにも眠そうな目をしながら起きる。

「おはよう七美。」

「ふあ・・おは・・・・り・諒?」

しかしオレの姿を見ると目をパチパチさせてオレの名前を呼んだ。

「諒だがどうした?」

軽口で返すオレ。すると七美は涙目になつてオレの体に抱きついてきた。

「諒！」

一元立

「よか二たゆう！謗が生きてたう！」

絆起てもない」と書いたのが、シテ痛いから離れてくれ

さつきからオレのろつ骨が悲鳴を上げてんだよ！

開けられた。

「七美、弁当買つて……き……た……失礼しました。」

その正体は明だつた。明はオレと七美を見るとそそくセビドアを閉める。

「おい誤解だ！？戻つてこい明日――」

それから約十分間七美はオレから離れる事は無かつた。そして今は、オレ・七美・明・理奈が病室にいる。

「いや、しかし焦つたぜ。部屋に入つたら寝てたハズの諒と七美が抱き合つてたんだからなあ……オレどれだけ空氣読まないやつかと思つたよ。」

「へへ七美も大胆ねえ？」

ハハハツと笑う明とニヤニヤしている理奈。あの後、なんとか誤解は解けたもののオレと七美は今だ明と事情を聞いた理奈にからかわれ続けていた。

「う～もう言わないでよお。自分でも今思つとはずかしいんだから…
・
・
・

顔を真っ赤にする七美。

「ハハハツ！それより田覚ましてよかつたよ。お前が死んだらオレのライバルはいなくなつちまう。」

思わず苦笑するオレ。全くコイツは…

話を聞くとじうやうオレは三日間ずっと意識が戻らなかつたりして。そりや心配するよな…

「ほんとによかったわ。植崎さんが大ケガで運ばれてきた時は七美がずっと『諒死なないよねえ…？』『田覚まさなかつたらどうしよ？…？』って泣き続けたんだから。ほんと慰めるの大変だったわよ。」

そしてまたニヤニヤと七美を見て理奈は笑う。

「ちよつ…その事は黙つててつて言ったのに…！」

さらに真っ赤になつて理奈を追いかける七美。それを笑いながら逃げる理奈。

「七美に感謝しろよ？何せお前が意識失つてた三田間ずっとお前のそばにいたんだからな。」

小声でオレに伝える明。そうだったのか・・七美に悪いことしたな。後で何か奢つてやるか。

「んじゃ オレと理奈はまだ仕事があるから。お前らはイチャイチャしどきな。ほら理奈行くぞ！」

「分かったわよ。じゃあ植崎さんお大事にね。」

そう言って明と理奈は出て行つた。部屋に残されるオレと七美。

なんかす」に気まずいんですけど・・・

オレは気まずい空氣に耐えられなくなり七美に話しかける。

「そういうやオレが起きるまでずっと看病してくれたんだってな！ありがとな！！」

「べ・別にそんな大した事じゃあ・・ただ私のせいでケガしたのに自分がそばにいなつてダメじゃない！！でも・・飯田君は残念だつたね・・・」

そう言って七美は悲しい顔をする。

「ああ。あいつもまだ若かつたのにな・・・

そのまま沈黙する一人。

「・・・なあ七美。」

「何よ。」

「お前は何の為に戦つているんだ？」

オレは飯田が最後に言つた言葉を七美に言つてみた。

「何の為に？」

「ああ。飯田が最後に聞いてきた事でな。だけどオレは何も答えられなかつたよ・・・オレ達はテロリストを止める為にここに入つたのに今はただテロリストを殺しているだけ・・・オレ達は何の為に戦つているんだ？」

何も言わず、黙つてオレの話を聞く七美。

「それだけじやない。」

オレは構わず言葉を続ける。

「オレは人が何故生きているのか分からなくなつてきた。自分達で勝手に争つて勝手に死んで・・・両方同じ人間なのに殺し合う。未来がある子供達が大人の都合で武器を持たされて・・・そして死んでいく。そこには何も意味なんて無い。オレ達は何で生きてるんだろうな?」

そこまで一息でしゃべるとオレは誰が置いたのか分からぬ机に置いてあるお茶の缶を開けて飲む。

何もしゃべらない七美が気になつて横を向くと七美は表情を変えず、ただオレを見つめていた。

「七美?」

「・・・・うの

「ハツ？」

何を言つているのか全く聞こえない。

「何でそんなこと言つのかって聞いてんの！！」

突然怒鳴り声を上げる七美。

「な・何だよ？ いきなり大声出して・・・」

「諒が変な事言つからじやない！ 戦う意味？ 何でオレは生きているのか？ そんなの頭の悪い諒に分かるハズないでしょ！！」

その言葉にオレは少しカチンくる。

「じゃあお前には分かるつていつのかー？」

「分かるわけないじやない！..」

「なんだよそれ！」

オレはワケの分からないことを言つ七美についつい大声を上げる。だが七美はかまわず続けた。

「少なくとも私は諒に生きていて欲しいって思つよー？なのに諒の言い方つたらまるで自分がいつ死んでもいいみたいに聞こえるじゃない！ ！ そんな事・・言わないでお・・・」

最後は半分嗚咽まじりだった。そのままつむいて泣き始める七美。また泣かせつちましたなあ・・

オレは七美を抱きしめる。そこには確かに温もりがあった。

「ごめんな？ オレは死んだりしないから・・だから泣き止め。」

「つう・・ぐすつ・・諒のバカア・・・」

飯田・・・オレはお前の質問の答えをまだ出せそうにない・・・けど、いつか答えを出すから・・そして自分の生きる意味も・・・だから見ていってくれ・・・

とつあえずオレは腕のなかにあるこの温もりを忘れないでおこうと心にそろそろ誓つた・・・

「おい、やうそろ泣き止めよ。」

「ヒクッ・・・ツ・・グスッ・・・」

オレは七美を慰めようとすると七美はオレの胸に張り付いたまま一向に泣き止む気配はない。

参つたな・・・

正直、オレは人を慰めるのはあまり得意ではない。
明がいればまた違つたろうがないにくオレはアイツの様に空氣を読まず、喋れる度胸も持ち合わせてはいなかつた。いまだ泣いている七美。

オレにどうしてこうしたんだよ・・・

オレはしばらく考えたあと頭の中にある名案が浮かぶ。

「泣き止んだらなんか願い事一つ聞いてやるかい。
「グスッ・・・ほんと?」

おつ〜反応した。つかなんかすげえ可愛いんですけどー!?

上田遣いをしながら涙田で見てくる七美を見てなぜかオレの心臓が

バクバク言い出した。

「お・おおっ！本當だ！！」

「絶対だからね…嘘ついたら理奈に」「諒に泣かされた…」って言つから！」

「ちよっ…それは反則だら…？」

実は理奈さんは七美のことをすこいく可愛がつてゐる。だからもしやんなことが里奈さんの耳に入らつものなら普段明が受けている鉄拳が今度はオレに向く。

それだけは避けなければならぬ。

「ダメッ！それとも約束破るつもりなの？」

「うっ…」

オレは言葉に詰まる。それよりお前今さつあまで泣いていたよな？まさか嘘泣きか！？

「じゃ決まりね！」

そつと七美はオレから離れた。

「…はあ…はあ…しあうがないな。で、願い事はなんだよ？」

「うーん…今はないから保留！」

七美はじぱりく手を顎にそえて考へた後そつと言つた。

「はあっ？何だよそれ。」

「いいじゃん。それよりお腹空いたからなんか食べにこいつよー。」

そのまま病室出る七美。・・またまにはこんな時間も悪くない。

「諒、早く行かないと店閉まつちやうよー。」

とつあえず今はこのつかの間の平和を楽しもう。

「あんまり食うと太るぞ?」

「つるわーー!」

「イテエー! 分かったからーー! 奢りてやるから殴るな。」

そしてオレと七美は近くのカフェに向かつた。その日は七美との食事で一日が終わった。

余談だがカフェに着いた後、七美がカフェのデザートメニューを食べ尽くししたせいでオレの財布が寂しくなった事は内緒だ。

・・・みんな女性に飯を奢る時は自分の財布と相談しようかな?

//ミッション4 作戦前夜、それぞれの想い

あれから二週間がたつた。

オレのケガはほぼ完全に良くなり、機体も修理されつつでも出撃できる状態になっていた。

ケガが治るまで七美は毎日オレの病室に来てくれたがそれを見ていた明と里奈にからかわれたのも今となつてはいい思い出だ。そして今、オレは今回の任務の説明を受けるために作戦立案室に来ている周りには各小隊の隊長やオペレーター、本部のおエラいさん方が皆一斉に集まっていた。

オレの横には明が、その少し向こうの長い机には理奈が座っている。実は明はデルタ第八小隊の隊長で理奈は本部とパイロットの通信を管理するオペレーターの役職に就いている。ついでに言えば七美はオレが隊長をしている第七小隊の隊員だからこの場にはいない。「これを言つと七美は怒るのだが・・・」

しばらくすると本部の司令官らしい人が前に出てきてしゃべり始める。

「全員聞いてくれ。この前の任務で捕らえた紅華の捕虜の証言からやつとアジトの場所を突き止めた。これより紅華壊滅の為の作戦を説明する。監スクリーンを見てくれ。」

前を見ると上からスクリーンが降りてきてそこに映像が映し出される。

「紅華は当曰、現在指名手配をされている武器商人と取引をするらしい。そこで各小隊を三つに分け、三方向から攻撃を開始する。そして一気に突入して紅華のリーダー及び指名手配中の武器商人を捕獲・確保してほしい。なお敵は武器商人から様々な最新武器を手に入れているらしいので注意してほしい。攻撃開始は明日の午前二時だ。作戦は以上。皆の健闘を祈る。それでは解散！」

司令官の声と共に各隊長達が一斉に席を立つ。

「オレ達も行くか。」

「ああ。」

オレと明も席を立てて休憩室に向かった。休憩室にはすでに先に来ていた理奈と待ちくたびれた様子の七美がいた。

「よお待たしたな！」

「ほんとよ。理奈はこんなに早く帰ってきたって言つたのに…」

明の言葉に七美がしかめつ面で対応する。

「悪い悪い。しかしこの作戦が終わったらオレ達もやつと一息つけるな。お前らは作戦が終わったらどうするんだ？」

「私は事後処理とかが残っているのでそれが終わったら休暇をとつて実家でのんびりするわ。」

「私はどうしようかな～？やっぱり休暇をとつてショッピングでも楽しもうかな～？」

理奈と七美が口々に答える。

「謹は必ずあるんだよ。」

明がオレに向かつて興味津津に聞いてくる。この戦いが終わったら
か・・・

「分かんねえ。終わってから考えるよ。」

オレは無難にそう答えた。だつてホントに分かんねえんだもん。

「何だよつまんねえな。」

「それならお前は何するんだよ?」

「ナンパだ!..」

「バカ!..」

オレが明に聞き返すと明は即座にそう答えた。答えた瞬間、明は理奈に殴られる。

「何すんだよ!..」

「明がアホな事言つからでしょ!..」

そのまま理奈と明は言ひ合ひを始める。ここいつもよく飽きないな。

「仲がいい事で・・・」

「ホントにね・・・」

「そろそろ時間来るし整備室に行くか?」

「やうね。」

オレと七美はまだ言い争っている明達を放つて整備室に向かつた。

「おう植崎! ケガはもうこいのか?」

整備室に行くと川島さんが心配そう話しかけてきた。

「もう大丈夫です。心配かけてすいませんでした。」

オレは川島さんにお辞儀をする。

「相変わらず堅苦しいな。もつと楽に行こうぜ。」

そう言つて笑う川島わん。

「お前らは何だ? テートか? か~若いつていいいねえ~!~!
「ち・違いますよ!~? 誰が諒なんかと~?」

諒なんかとつて・・・お前結構傷つくんだぞ!~?

オレの心の弱いを無視して「当たり前だが・・・」川島さんは一気に
シケた様な顔になる。

「やうなのが? ちつ・・・つまらんな。じゃあお前らゆづくじりよ。
何せあと一時間後には戦場に行かないといけないんだからな。」

じゃあ整備があるからと川島さんはどこかに行ってしまった。戦場
か・・・

あれから飯田が聞いてきた疑問と自分のなかの疑問の答えはまだ出
ていない。

もしかしたら一生答える出ないかもしれない。

だけど・・・

「どうしたの？まだケガが痛む？」

七美が心配そうにオレの顔を覗き込む。

「大丈夫だよ。」

そう言いつと七美はホッとした顔になり、次の瞬間には笑顔になつた。
もし二の笑顔を守れたのなら・・・自然と答えは出る。
何故だかそんな気がしてならなかつた。

その頃、明と理奈は・・・

「七美つたら私を置いていくなんて・・・」
「まあまあ一人きりにさせてやろうぜ？」

明と理奈は諒達に置いてきぼりにされ、一人で整備室に向かつてい
た。

「あと一時間で出撃か。」

「なあに？怖いの？」

理奈がからかい気味にそう聞く。

「そうかもな。」

「あら今日はエライ素直ね？」

「ほつとけ。」

「・・・。」

急に理奈が黙つて立ち止まる。

「おじいちゃん？」

「…………よね……」

「あん？」

「明死なないよね？」

理奈の顔を見ると今にも泣きそうになっていた。

「理奈・・・」

「諒が大ケガして運ばれた時があつたでしょ？私・・・ホントは怖かつた。明がいつか諒の様になるんじゃないかなって・・・」

「・・・・・」

何も言えない。何故ならそうなる可能性の方が高いからだ。特に今回任務では敵も多く、死ぬ確率がグンッと上がる。その中で生き残る事は今の明でも全く保証は出来なかつた。
代わりに明はギュッと理奈を抱きしめる。

「確かにオレが生き残ることは保証できない。だけどオレ約束するから・・・理奈の為に必ず

生きて帰るつて・・・約束するからーーー抱きしめたままそつ約束する明。

「絶対だから・・・約束守らないと顔面100発殴るからねー？」

「ハイハイ。努力はしますよ・・・」

「あと・・・」

「うん？」

「この戦いで生きて帰つてきたり……キスしてあげてもいいわよー！」

理奈は恥ずかしいのだろう。明の胸に顔をうすめたままそこから喋りとしなかつた。

「……理奈……その約束、忘れるなよー！」

明は微笑みを浮かべて理奈を抱きしめた腕に力を込める。そして出撃まで明と理奈はずつと抱きしめ合っていた……

今、それぞれの想いと共に生き残る為の戦いが始まる……

//ミッション5 紅華壊滅作戦開始

ガドゥン・・ガドゥン・・

午前一時五十六分、まだ朝口もでないこの時刻にただWAの足音だけが聞こえる。

ガドゥン・・ガドゥン・・ガドゥン・・グウンン・・

しばらくすると足音が止んでそこから一人の人影が現れた。

「・・・あれがアジトか・・・」
「間違いないわ。ポイントも合つてゐる。」

二人はほんの数キロ先で明るく光つている都市を見て言葉を交わす。その二人の人影・・・諒と七美は建物の位置を確認すると自分の機体に乗り込んだ。後ろには十数機の諒や七美と同じ機体が並ぶ。

諒や七美のいるテルタ第七小隊は紅華壊滅作戦の先発としてアジト正面からの突入隊に組み込まれていた。
諒はコックピットの左脇からおもむろに通信機を取り出す。

「突入隊。配置準備完了。これより紅華・アジトに突入する。」「了解。諒、無理は禁物よ。」

理奈との通信が終わり、諒の機体は一度周りを見ると手を上げる。
そしてその場にいるC.T.I.Fの機体全部が都市に向かつて突入を行した。紅華壊滅作戦の開始である。

諒の機体はアジトに入ると周りをガトリングで一掃する。

しかしテロリスト達もアジト攻撃をあらかじめ予期していた様で、対WAバズーカで反撃してきた。その後ろからドルガが何機も出てくる。

「七美！先にドルガを仕留めるぞ！！」

「了解！！」

諒のガトリングと七美のバズーカが一瞬で一機のドルガを潰した。

「クソツ！数が多い！？」

「諒危ない！？」

「うわああああ　　！？」

後ろで対WAバズーカを持つていたテロリストが七美のバズーカで吹き飛ぶ。

「悪い七美！！」

「どういたしまして！それよりマズイよ！？」

すでに歩兵を中心とした制圧部隊が武器を持ったテロリストと衝突し、辺りは乱戦状態になっていた。

作戦では突然の奇襲に混乱した状態に乗じて一気に制圧するという計画だったのにこれでは消耗戦になってしまつ。

「ほかの突入部隊はどうしたんだ！？」

「そんなの分かるわけないでしょ！」

「通信は！？」

「ダメ！電波妨害で使えない！？」

「チツ！しようがない。早く紅華のリーダーを捕まえるぞ！…！」

「分かった！！」

オレと七美は周りのドルガやテロリスト達を倒しながら奥へと進んでいく。

そこで急に通信機が作動した。

「ジジツ・・・ガガガツ・・・こち・・・ら・ピガツ・CT・本・部ガツ・・第・小隊・・危・・・険・・・」ちりCTIIF本部！デルタ第八小隊！！誰か応答を！？」

やつと連絡が繋がった通信機からは理奈の必死な呼びかけが聞こえた。

「理奈どうした！？」

「諒！？第八小隊からの通信がいきなり途絶えたの！お願い！！明を助けに行つて！？」

「明が！？分かった！場所はどこだ！？」

「都市の中心部よ。お願い、早く！？」

その後、電波障害により理奈からの連絡が途絶える。

「七美。聞いてたな！中心部に急ぐぞ！…！」

「任せて！…！」

二機は背中のブースターを使って、中心部に急いだ。一方、音信不通になっていた明のいる第八小隊は中心部の敵と必死の攻防戦を繰り広げていた。

「「ちから」テルタ第十三小隊コード3。上野隊長！？撤退を・・・うわああああ！？！？！」

悲鳴と爆発音を最後にその隊員との通信がノイズする。

「コード3ー？チクショウ何てヤロウだ！！」

明の部隊はほぼ壊滅をしていた。いや・・・全滅と言った方が正しいかもしない。すでに味方で生き残っているのは明の機体だけでほかは完全に機能を停止していた。

ここに来た時は明の周りには明の小隊だけではなく、ほかに一つの小隊が一緒だった。

なのに結果はこのザマである。

明の前には最初、五機のドルガが武器を持つて立っていた。この程度なら軍のエースが集められている明達には何にも問題は無かつた。本来ならば・・・

「まさか敵さんがあんな秘密兵器を隠し持っていたなんてな・・・」

明達の部隊を全滅させた元凶はその奥にいた。

それは両肩に戦艦でも楽に破壊できそうな巨大なミサイルランチャーを装備し、両手にはこれもまた巨大なガトリングを持っていた。脚部はキャタピラで機体のそこのじゅうに機関銃が取り付けられている。

「よりによつてダイダロスかよ・・・」

ダイダロス

正式名称はRS632型と呼び、ロシアが少ない兵器で都市を守れる様にという事を目的に作られた都市防衛用の最新WAである。その兵装と耐久力は軍の一個中隊に匹敵すると言われている。ただし作るのに相当のコストが掛かり、安易に作ることができるのが難点だ。

ドルガを全滅させた後、突然出てきたコイツに明以外の味方は全てやられたのだ。

「今日、取引していたのはコイツか……」

グガツ・・グガガツ・・・

ダイダロスはいやな機械音を鳴らしながら肩に背負っているミサイルランチャーを明に向けてくる。

「危ねえ！？」

明はブースターを使って前に行くとそこに大量のミサイルが撃ち込まれる。

「仲間のカタキをとつてやる……」

明は背中のレーザーブレードを抜いてダイダロスに切り掛かる。しかしダイダロスは体に付いている機関銃で明を牽制する。

「クソッ！近づけねえ！？」

ガキッ！？

「しまつた！？」

機関銃の弾が足に当たった。その瞬間に隙を突いてダイダロスはミサイルランチャーを連続で撃ち込んでくる。

「オレはまだ死ねないんだよおーー！」

明は手にあるマシンガンでミサイルを撃ち落とすが何個かは撃ち落とせずに機体の足に当たる。

「ぐうつー？」

強烈な衝撃が明を襲つた。そして残りのミサイルが明の機体に迫る。

「理奈・・・」

だが残りのミサイルが明に当たることは無かつた。突然ミサイルが明の目の前で爆発したのだ。明はわけが分からずただ呆然とした。

「明！大丈夫か！！」

「明！生きてるわよねーー！」

後ろから諒と七美の声。一人はギリギリで間に合つたのだ！

「神はオレを見捨てて無かつたか・・・」

そして頭の中で理奈の言葉を思い出す。

「死んだら100発殴るからねーー！」

まだ・・・殴られるのは早ええ！－そして明は操縦かんを握りしめた。

//ミシヨン 6 死闘

殺させるかー！

オレは明に//ミサイルが撃ち込まれた時、そう思つて反射的にガトリングの引き金を引いた。

距離はギリギリガトリングの弾が届くか届かないかくらいだったがオレの撃つた弾は運よく//ミサイルを全て撃ち落とした。

//ミサイルの迎撃に成功して、オレは明の前に滑り込む。

「お前何勝手に死のうとしてんだよ……」

「うるせえ！ オレだつてがんばったんだよ……」

オレと明は軽くさう言こといつと今やつを明に向けて//ミサイルを放つたやつを睨む。

「ダイダロスなんてまた厄介な相手と戦つてるわね。」

七美がそう言つて後ろからダイダロスに向かつてバズーカを放つ。バズーカの弾は見事に命中するがダイダロスの機体には少しの傷しか付いてなかつた。

「何で装甲だよ！…」

「七美！ とりあえず明を連れて撤退しろ！…」

オレは七美に後退を促す。たつた二機ではコイツには勝てない。応援を呼ばないと・・・

「絶対いや！！」

「なつ！？」

「後退したらまた諒は一人で戦う気でしょ！？もう諒が傷つくのなんてみたくない！！」

オレは言葉に詰まった。七美の言うとおりだからだ。しかしオレは七美に言い返す。

「だからって二人共死んだら元も子も無いだろ！？！」

「死ななきやいいんでしょ。」

さつきから七美はバズーカを、オレはガトリングを撃つているがダイダロスには全く効いている様子は無い。ダイダロスも機体の武器全てを使ってオレ達を攻撃していく。

ズガン！！

「きやつ！」

「七美！？」

七美の乗っている機体の腕がダイダロスのガトリングによつてへし折られる。

明を助ける為に强行突入していくせいですでにオレと七美の機体はボロボロになっていた。

「IJのくらい大丈夫よ。諒は自分だけに集中してなさい！！」

七美は機体を持ち直して攻撃を再開する。不思議だ・・・七美を見ると勇気が出てくる。オレは何故か七美を見て力が湧いてきた。

「仕方ないな！七美、ダイダロスのヘッド部分に集中砲火しろ！」

「分かつた！」

七美はオレの指示通りヘッド部分にバズーカで集中砲火し始めた。オレはレーザーサーベルを抜き、単機でダイダロスに突っ込む。

機体に弾が当たり、衝撃が来てもオレは機体を止めなかつた。狙うは・・・ダイダロスの制御回路！！

だがダイダロスはここで思わず動きに出た。正面を向いたまま後ろに後退を始めたのだ。ダイダロスに近接武器は付いていない為、おそらく近接攻撃を警戒したのだろう。

「クソッ！あともうちょっとなのに！…！」

ミサイルが目の前に迫る。悔しい・・・生きたい・・・

しかしミサイルは諒の機体に当たる直前で爆発した。

「諒、行け！！」

明が片足を失つて倒れたままでマシンガンを撃つたのだ。さらに後退していくダイダロスの動きが急に止まる。

その脚部のキャタピラはベルト部分が完全に千切れていった。

「諒！足は止めたわよ！…！」

七美がバズーカを持つたまま叫ぶ。

「サンキュウ！七美、明。オラアアアアアアアアアアツアアア！…！」

オレはレーザーサーベルをダイダロスの首部分に力いっぱい突き刺した。

ギヤ、ギヤ、ギヤ、ギヤ、ギヤ、ギヤッ！？

強烈な機械音と共にダイダロスの動きが段々と小さくなつていく。

ギヤ、ギヤ、ギヤ、ギツ、ガツ、

そしてついにダイダロスはその動きを完全に停止させた。

「・・・勝ったのか・・・？」

「勝ったんだよ。」

オレと七美はコックピットから出る。

「オレは・・・生き残つたんだよな・・・？」

「ホントだぜ。あんな無茶な突撃しやがつて、ヒヤヒヤしたじやねえか！」

明がそばに来てオレの肩を背負つた。

「そりよ、あんな無茶なことして・・・バカ・・・」

七美もオレのもつ狂方の肩を背負つ。前はあんなに周りがどうでもよかつたのに・・・

「七美。」

「何？」

「・・・何でもない。」

「なによお。」

君が生きている。ただそれだけで・・・そして・・・

「おおーい。味方がきたみたいだぞ。」

明がそう言つと遠くから味方の声が聞こえた。一いつしてオレ達の紅華壊滅戦はその幕を下ろした

ラストミッション 聞いの後に・・・そして

紅華壊滅作戦から丸3週間が経つた。あの後、帰つてからがさらに大変だつた。

味方に連れられて基地に帰還したオレ達を最初に出迎えたのは目を真つ赤に腫らして出てきた理奈さんだつた。

理奈さんは明の姿を見るなり明に飛びつくと人目をはばからず、大声で泣き出した。きっと今まで我慢していた気持ちが一気に湧き出たんだろう。大ケガをしていた明が理奈に抱きしめられて苦しんでいたのは内緒だ。

基地内では盛大なパーティーが開かれ、オレ達はダイダロスをたつた三機で倒したという事で皆から賞賛を受けた。

CTIF本部もダイダロスをたつた三機で倒したことにより加えて紅華のリーダーと武器商人の捕獲（実はあのダイダロスに両方共乗つていたらしい）の功績を重く見たらしくオレ達をCTIF大隊の司令官にという通達があつたが全て断らしてもらつた。

オレに人の上に立つ度胸なんて無い。

明と七美に何で断つたのかを聞くと、明は
「だつてめんぢくせえじやん。」

七美は
「私には似合わないから。
だそうだ。」

全く欲のないやつらだよな。まあ人の事は言えないが・・・そして

オレ達は長い休暇を取つて日本に戻り、のんびりと過ごしていた。

ちなみに今、オレと七美はカフェでお茶をしながら世間話をしてい
る。

「でもあれから三週間経つんだもん。早いもんよね。」

「ああ。早かったな。なんだかあつという間だつたよ。」

「だよねえ、そういうえば明と理奈の事聞いた？」

「聞いたぞ。付き合い始めたんだつてな？明もスミに置けないやつ
だよ。」

あんなに言い争つていた二人が今では自他共に認めるラブラブカップ
ルだもんな。

「もう両方の親にも紹介したんだつて。ゴールまですぐそこつて感
じ。」

七美はヤレヤレと首を振る。

「『ゴールねえ・・・』

「まあ私達も人の事言えないよねー！」

そう言って七美はオレの隣に座つて腕を組んできた。

「バツ・・・恥ずかしいだらうが！！」

「え、別に良いじやん。付き合い始めたんだ少ししくじりにラブラブ
させでよ。」

そう、あの戦いの後からオレと七美は付き合い始めたのだ。

あの時は驚いたな・・・だつて願い事を一つ聞くという約束をまだ覚えていてしかもその願いが「私から離れたらダメ!」だからな・・・。さすがのオレもあの時ばかりは思考が止まってしまった。

思えば色々なことがあった。

飯田の死、疑問、戦う意味、生きている意味、七美の涙、ダイダロスとの戦い、そして・・・疑問の答え・・・

自分は戦いを止めたいから戦うのだ。

世界から戦いを無くす事はできない。でもそれを止めて、被害を少なくする事はできる。

だからオレは戦うのだ。そして人は、死があるからこそ生きている意味がある。

人は大切な人がいるからこそそれを守るために生きるのだ。
矛盾しているかもしだれないがこれがオレの答えだ。オレは隣で笑っている七美をみた。七美は笑顔でオレの腕を抱きしめている。

飯田・・・オレの答えて満足はできたか・・・？

オレはこれから少しでも子供達に被害が出ないように戦うから・・・

大切な人を精一杯守るから・・・

お前が出来なかつた事をオレがするから・・・

だからもし・・・もしまたいつか人間に生まれ変わったなら・・・

その時に会おう・・・

いの壁の下で…！

ラストリミッション　聞いの後に・・・そして（後書き）

いやあ～終わった。さて皆なんどうだったでしょうか。「この星の下で、リメイク版」短い短編ですが楽しめたら幸いです。ではまた他の作品で会いましょう。以上、ダンでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3783h/>

この星の下で：Re

2010年10月10日16時52分発行